大学文書館へ行こう

第10回 「松村松年の足跡を訪ねる」

北海道大学大学文書館　井上　高聡

松村松年自筆原稿「面白き摂食の本能」（1928年、大学文書館蔵）

虫好きの無頼派

札幌は初夏を迎え、構内のあちこちに花が咲き、モンシロチョウやモンキチョウが飛び交っています。この「モンシロチョウ」、「モンキチョウ」という昆虫の日本名を決めたのは、札幌農学校を卒業し、長く北大の教授を務めた昆虫学者松村松年（しょうねん）（一八七二～一九六〇年）です。

松村松年は一八七二年、現在の兵庫県明石市に生まれました。学校そっちのけで虫捕りなどに駆け回り、何度も落第する相当にやんちゃな少年だったようです。兄の友人和田健三（札幌農学校卒業生）のすすめで、一八八八年札幌農学校予科に入学し、本科へと進学します。在学中にも武勇伝に事欠かず、野球や歌留多にも夢中になる無頼派学生でした。一方で昆虫学を本格的に研究し始めます。当時、札幌大通にできたばかりのアーク灯に集まる虫を一匹も逃すまいと自家製の虫網を振るって、昆虫標本を集め、本科一年のときには専門誌『動物学雑誌』に論文「北海道産鞘翅類」を発表しました。一八九五年に提出した卒業論文「二十八星瓢虫（てんとうむし）及其駆除法」は、最初の著書『害虫駆除全書』（一八九七年）の基となります。卒業後は、研究生を経て札幌農学校助教授となり、ドイツ・ハンガリーに留学して帰国した一九〇二年に教授に昇任します。

チンチロリンが松虫

このころ松村は、当時の動物学の重鎮から昆虫の日本名を定めるよう依嘱を受け、特にチョウ・ガを中心に取り組みます。近代になるまで、日本では昆虫個々に統一した呼び名はなく地方地方で異なりました。例えば、かつて東京と大阪とでは「松虫」と「鈴虫」の呼び名がそれぞれ逆だったそうです。松村は東京の呼び名に合わせて日本名を決定しました。その結果、チンチロリンが「松虫」、リーンリーンが「鈴虫」と決まりました。中学校や高校の古文の授業で、古文に出てくる「松虫」は現在の「鈴虫」、古文の「鈴虫」は現在の「松虫」と教わった記憶はないでしょうか。古文は京都中心の記録なので大阪地方の呼び名、現在は松村の日本名統一に従い東京地方の呼び名、と考えると合点がいきます。

日本の昆虫学は、昆虫に統一した日本名を付け、国際的な学名と照合し、分類していくところから出発します。松村はその出発点を担った昆虫学のパイオニアでした。以降も松村は、昆虫分類学の分野の第一人者として、新種の発見、昆虫目録・図鑑の編纂、専門書・教科書・啓蒙書の刊行、昆虫学専門欧文雑誌『インセクタ・マツムラーナ』の発刊と多くの仕事を積み重ねます。

札幌農学校生時代の松村松年（1890年代前半、大学文書館蔵）

松村松年ゆかりの資料

松村は戦後、その功績から日本学士院会員となり、政府から文化功労者の称号を受けます。昆虫学の泰斗であるにも拘わらず、大学内では今一つ知られていません。けれども、松村ゆかりの資料はあちこちにあります。

附属図書館は、先に上げた図鑑・著書・雑誌などを多数所蔵しています。さらに松村には評論・随筆も多く、『生物の流転』、『科学者が投じたる宗教界への爆弾』、『人間学としての体育』など面白そうな著作があります。総合博物館は、松村が収集した一二万個体を超える昆虫標本「松村コレクション」を収蔵しています。大学文書館には、松村の自筆原稿、自筆の手紙、松村の講義を記録した受講ノートなどを所蔵しています。

そして、クラーク像の斜向（はす）かいにある緑色の屋根の建物、「旧昆虫学養蚕学教室」です。一九〇一年建築のこの建物で松村は研究に勤しみました。この建物の北側には石造の「旧昆虫学標本室」（一九二七年建築）が建っています。

松村とゆかりの深い昆虫を探しながら、その足跡を訪ねて散策するのも楽しいと思います。

標本が並ぶ研究室の松村松年教授（1910年代、大学文書館蔵）